

# 飯野八幡宮

## 幣殿・拝殿屋根修理工事現場見学会

### 飯野八幡宮の沿革

飯野八幡宮は康平年間奥州合戦の時、源頼義が京都石清水八幡宮より勧請すると伝えられるも、現存の鎌倉時代の注進状によれば、文治2(1186)年御本社石清水八幡宮より御正体を奉じて赤目崎見物岡に勧請し、その後元久元(1204)年社殿の火災により、社地を現在の地飯野平に遷宮し、建永元(1206)年に完成した。

宝治元(1247)年北條泰時の下知により好嶋荘を寄進され、文禄5(1596)年佐竹氏によりの安堵高によれば社領650石となる。江戸時代には幕府より朱印地400石が定められ、平藩よりは黒印地50石が寄進された。

当時は社家32人、供僧寺16坊となり磐城4郡の総社として明治12年には県社に列せられた。

### 工事概要

いわき市指定有形文化財(建造物)、飯野八幡宮幣殿拝殿について、屋根のこけら葺は平成11年に保存修理が行われた際に葺き替えがなされたもので、18年を経過しており、こけら板の損耗、割損が見られ、一部では雨漏りが生じた時期もあり、耐用年数に達したと考えられる為、葺き替えを実施するものである。

なお、腐朽している拝殿縁束、縁貫、幣殿切目長押と拝殿下屋の中棧は取り替え、腐朽の著しい唐破風鬼板、拝殿鬼板(西側のみ)と千鳥破風上の鬼板は、作り直したものを箱棟に据え付ける修繕も併せて実施いたします。

### 修理の意義

こけら葺は概ね耐用年数が20年となっているため、このような修理が必要です。もっと耐用年数が高い銅板葺きや瓦葺きのほうが長持ちするのでそのほうが合理的と考えがちですが、銅板葺きや瓦葺きの耐用年数は約100年となっており、その間全く修理が行われなくなってしまう。

100年後の修理となると本体の傷みも現れ大修理となってしまう、また修理技術の伝承も失われてしまう恐れがあります。

20年という周期は技術を伝承するうえで大変重要です。最も傷みが進む屋根にあえて薄い杉板で葺くことで管理者は否応なく20年ごとに屋根葺き替え修理を施し、あわせて本体の小修理もすすめられます。

### こけら葺き

「こけら」とは木片を意味しており、榿きわらや杉などの薄い手割りの板を野地板の上に1寸(3cm)ほどの間隔で葺き重ねます。1枚の長さが約30cmですので10枚重ねとなり、竹釘(孟宗竹を乾煎りしたもの)で下から上に向け留めていきます。手割りにも意味があり、機械でスライスすると木の導管を傷め水が浸透しやすくなって傷みが進んでしまうため、あえて手割りで導管を残しながら一枚一枚割って行きます。また、板と板とのわずかな隙間が屋根裏の通気をうながし、木材の耐久性を高めます。

竹釘は板一枚に約7~8本打ち込みますが、竹釘の頭が潰れることにより雨水の侵入を防ぐ効果があります。現代の金属製の釘ではサビにより雨水が入ってしまいます。

#### 見学会

日時：平成29年6月30日(金) 午後3時~

申込先：飯野八幡宮社務所 0246-21-2444 mail:hatiman@noteplan.net

参加人数：先着200名までとします。